

## 第2章

# 日宇川流域の歴史と文化財



日宇川流域の位置

### この地域の小中学校

小学校：黒髪くろかみ小学校、日宇小学校、天神小学校、福石小学校、大塔だいとう小学校、港小学校  
中学校：日宇中学校、福石中学校、崎辺中学校

## 第2章 ひうがわりゅういき れきし ぶん かざい 日宇川流域の歴史と文化財

### ふりゅう さと 浮立の里

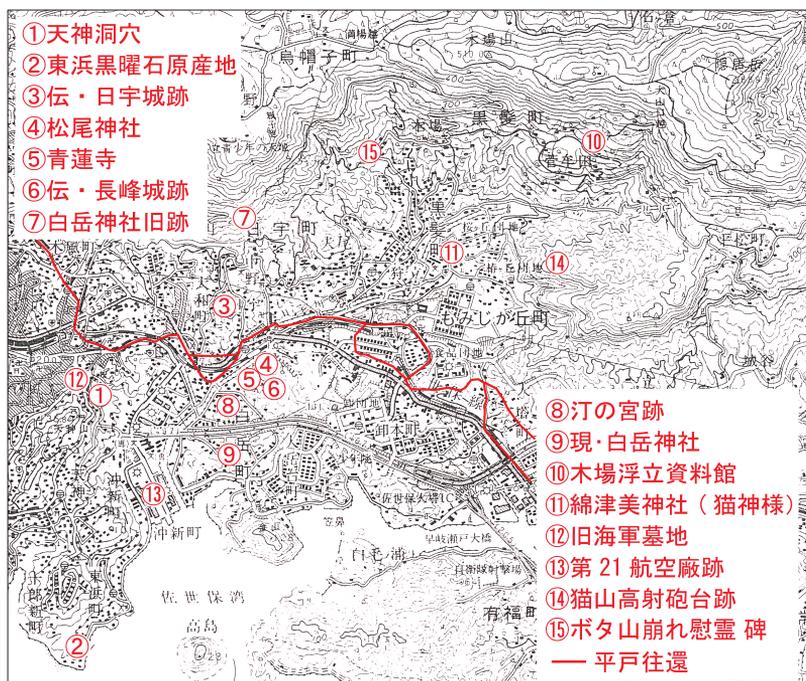
ここでとりあげる地域は、隠居岳（標高670メートル）に源流がある日宇川の流域を指しています。北は浮立の里として知られる上木場地区から、南は尼瀧の海岸、そして、日宇川の河口から黒髪町の低地、また、日宇川によって造られた谷という見方では、さらに大和、天神、東浜もこの地域に入ります。



日宇川河口の干潟

佐世保の中心部に近く、交通の要衝でもあり、JR、西九州道路、国道が通っています。江戸時代には、佐世保地方の主要道路だった平戸往還（街道）も通っていました。

現在では、ずいぶんと埋め立てられてしまいましたが、昔は干潮になると、沖新あたりの河口部から黒髪まで、潮が引いて干しあがる海の景色から、干海（ひうみ）と呼ばれ、日宇という地名の起りとも考えられています。



日宇の地図

## 石器材料の産地

東浜は、市の中心部に最も近い漁港です。この東浜は、海岸に沿って町並みがあり、その西外れの海を望む丘の上に淀姫神社があります。

この神社の裏手一帯が旧石器時代や縄文時代に、刃物や矢じりの材料となっていた黒曜石の原産地です。黒曜石は、溶岩の一種で天然のガラスです。割れ口はカミソリの刃のように鋭く、石器の材料としてよく使われました。この黒曜石は濃い青灰色をしています。



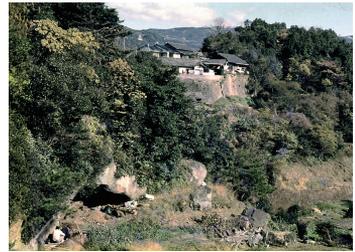
淀姫神社遠望

- 1 長崎県を含む九州北西部には黒曜石の原産地が多い。針尾島(第12章針尾島参照)や佐賀県伊万里市の腰岳は特に有名。

## 天神洞穴

日宇地区では、石器時代の大きな遺跡はあまり見つけていませんが、唯一、天神2丁目の天神洞穴は重要な遺跡です。今の日宇地区には入っていませんが、日宇川の流域という視点で見れば、日宇地区に入ります。

遺跡は、東山公園(旧海軍墓地)の南側の小さな谷あいであり、間口が5メートル、庇の高さ2メートル、奥行き4メートルのこじんまりした洞穴遺跡です。



天神洞穴

1972年(昭和47)撮影



天神洞穴の押型文土器(約8,000年前)

天神洞穴からは、後期旧石器時代(約25,000年前)から弥生時代(約2,000年前)にかけての遺物が発見されました。

旧石器時代は、東浜の黒曜石を使って石器作りをしていたようです。この時代は、狩りをしながら移動するという生活をしているので、その途中で立ち寄り、数日を過ごすなかで石器を作っていたようです。

縄文時代になると定住するようになり、ムラを作っていた場合もあります。人々が定住した遺跡からは、重すぎて移動生活に向かない道具が出土します。それは石皿と呼ばれる、木の実を砕く臼などです。また、木を伐採したり、道具を作ったりするための石斧も、定住には欠かせない労働用具です。石皿と石斧は、その遺跡に人々が定住していたかどうかを判断する上で、重要な遺物となります。

天神洞穴では、特に、縄文時代早期(約8,000年前)の地層からはこれらの石器は見つかっていません。その代わり、狩りの道具である矢じりや獲物の解体具である石匙(スクレイパー)が多く見つかりました。このことから、他に拠点となる遺跡があって、天神洞穴は狩りなどで遠出したときのキャンプ地として使われていたと考えられます。

### 古墳時代から平安時代の日宇

この頃の遺跡は残念ながら発見されていません。近代になって、軍港佐世保に隣接した地域となったために市街化が進み、すでに破壊されていることも考えられます。

佐世保を包む長崎県北部では、この時代の遺跡が極端に少なくなります。石器時代は、狩りや採集で暮らしていたため、丘陵や山が多い地形でも問題は無かったのですが、稲作を始める頃になると、稲作に向けた平地が少ないために住み難くなったのでしょう。

### 歴史に初めて人の名が現れる

1319年(元応元)の古文書に、「日宇」を名乗る小領主の名が見えます。日宇小次郎入道や日宇弥五郎入道覚心で、日宇に現れた最古の人名となります。

平安時代の終わり頃から、長崎県北部や佐賀県唐津地方には「松浦党」と呼ばれる武士集団が現れ、地域ごとに土地を支配していました。日宇には、その地名を名乗る日宇氏がいたのです。

その武士たちは小さい勢力であったので、お互いに同盟関係を結ぶために、文書で契約しました。「一揆契諾」と呼ばれるもので、1384年(永徳4)の「下松浦住人等一揆契諾状」には、日宇越前守純の名が見えます。並んで、宗家松浦氏や相神浦氏、佐世保氏の名もあって、当時、佐世保地方にいた武士が分かると同時に、日宇氏が、それらの武士と対等の立場であったことも示す重要な史料です。



伝・日宇城跡

第2次世界大戦中、旧日宇中学校の近くで防空壕が掘られたときに、多くの墓石が発見されました。その墓石の一つに、「永正十五年 妙珍禪尼建立」の銘が彫られていました。



永正十五年 妙珍禪尼建立の墓

永正15年とは1518年のことで、室町時代になります。当時、日宇には尼寺があったのでしょうか、尼僧の妙珍禪尼が墓を建てたことをこの墓石は物語っているのです。この頃には、岡達仲や八並舎人という武士がいたと伝えられていますので、妙珍禪尼もそれらの人物と何か関係があったのかもしれませんが。

## 戦国時代の日宇

16世紀の戦国時代になると、小武士団は戦国大名の支配下に入っていきます。肥前地方の西側（現在の長崎県）には、北部に平戸松浦氏、中央部に大村氏、そして島原半島に有馬氏が勢力を持っていました。

1545年（天文14）に大村氏の大村純前は自分の領地の北の端を佐世保の山中観音堂（桜木町の山ノ田野水池付近）までと宣言しています。16世紀の半ばに佐世保、日宇、早岐、針尾は大村氏の支配下になっていたのです。

日宇氏はどうしていたのでしょうか。その頃、日宇には岡達仲という人物がいたようですが、日宇氏が岡氏に名を変えたのか、岡氏に入れ代わっていたのかは、分かっていません。

その後、佐世保や日宇地方は、武雄（現在の佐賀県武雄市）の後藤氏の領地になり、さらに1563年（永禄6）頃、今度は平戸松浦氏の支配地となりました。その頃には、<sup>2</sup>日宇舎人という人物がいたという記録があります。白岳町にある松尾神社と青蓮寺も、日宇舎人が創建したといわれています。



山中観音堂（桜木町）



松尾神社



松尾山青蓮寺

平戸松浦氏や大村氏は、戦国大名として成長していくなかで、在地の武士たちをその支配下に組み入れました。なかには不幸にして滅ぼされてしまった武士もいたのですが、室町時代の日宇氏がどのようになったのか、よく分かっていません。

<sup>2</sup> 日宇舎人＝八並舎人とする説もある。

### 白岳神社と後藤惟明

白岳町の名前の由来にもなっている白岳神社は、1578年(天正6)に後藤惟明が建てたといわれています。後藤惟明は平戸の松浦隆信の三男で、1577年(天正5)に日宇の松尾山に長峰城という城を築いて移り住んだといわれており、このとき城の鎮守(守り神)として白岳神社を建てたといわれています。



伝・長峰城跡遠望

最初は烏帽子岳の中腹にありましたが、麓で落馬事故が起きたり、夜中に法螺貝の音が聞こえたりするなど奇妙なことが続いたので、惟明は、祭ってある神様がこの地を嫌っていると考え、麓の海辺に移して「汀の宮」(浜の宮)と呼びました。「汀の宮」は、今の南大宮幼稚園のあたりにありましたが、1967年(昭和42)の大水害で被害を受けたため、1976年(昭和51)に現在地に転移しています。



白岳神社旧跡



現在の白岳神社

### 江戸時代の日宇

江戸時代の日宇村は、市中心部の戸尾町を流れる馬ノ氏川から、大塔までの範囲になります。福石や俵ヶ浦半島の庵ノ浦も日宇村の一部でした。

JR日宇駅前の裏通りは、現在の国道ができるまでは主要道路でしたが、この道はもともと平戸往還(街道)でした。大和町からの山裾を回ってきた道は、ここを通り、日宇川の飛び石を渡って、大塔の榎茶屋を経由して田ノ浦に入りました。

日宇は、平戸往還の宿場となっていたので、往還沿いに家々が立ち並んで賑わう一方、山裾には農家が点在する、静かな農村の風景が広がっていたのでしょうか。

3 宿場とは、宿泊、馬や駕籠の乗り換えを行う場所のこと。人々が集まり、宿場町を形成していた。

## 昔ばなし～ねこ山～

今から400年前、日宇に山本入道という侍が住んでいました。ある夜、畑を荒す猪退治に出掛けるところ、家では妻の出産が始まり、それが大変な難産だったのです。

夫婦が可愛がっていた猫の玉は、下女に姿を変え、妻の危機を入道に知らせに行きました。しかし入道は、その下女を物の怪の仕業と思い、矢を射かけてしまったのです。叫び声とともに下女の姿は消え、その後には点々と血が落ちていました。

入道がその血をたどっていくと、なんとわが家にたどり着いたではありませんか。

あわてて座敷に飛び込むと、おびたしい血の中で、虫の息となっている妻の姿がありました。

入道の必死の介抱により、妻は一命を取り留めることができました。



イラスト：木寺十郎

妻の容態が安定すると、入道は、すぐに血をたどって座敷の下に入ってみました。そこには血まみれになり、矢が刺さったままの玉の死体が横たわっていました。玉は、命をかけて、妻の危機を知らせに来たのです。

それから間もなく、入道夫婦は玉を祀る小さな祠を建てました。これが、今も綿津美神社の境内にある猫神様の祠で、この後、このあたりは「ねこ山」と呼ばれるようになりました。



ねこがめさま ねこ山  
猫神様の祠

ねこ山の話は伝説であるが、山本入道は実在した人のようである。昭和50年頃に、日宇の綿津美神社の近くにある、山本一族の墓が改葬されている。

その入道の墓と伝えるところから、古い有田焼の碗が出土した。三川内では、まだ白磁ができない1630年頃のもので、これは、伝説の時代の400年前に符号するものである。実在の侍が、どんなことから伝説の主人公になったのか謎であるが、土地の名士として、人々の尊敬を集める立場であれば、似たような出来事があった、語り伝えられたのではないだろうか。

## 日宇の誇り 木場浮立

江戸時代、農民は厳しい農作業ばかり行っていたわけではありませんでした。雨乞いや、豊作を祈願する行事などに結びついた芸能を演ずる余裕もあったのです。

木場地区に伝わる木場浮立もその一つです。1690年(元禄3)に西有田(現在の佐賀県西松浦郡有田町)の龍泉寺から伝わり、今日まで古式そのままに伝わっています。



木場浮立



クライマックスの獅子舞

総勢は150～200人から成り、弓や槍、鉄砲を持つお散歩などの大名行列を模した道中浮立から始まり、鉦や笛、太鼓、地囃子によって舞う庭浮立に入ります。クライマックスは獅子舞で、シロ皮で作った独特の獅子が登場します。鉦や笛などの賑やかさが、身も心も浮き立つことから「浮立」となった、あるいは「風流」がなまって「浮立」となったといわれています。

今では、家元の龍泉寺浮立はなくなっていますので、江戸時代の民俗芸能を古式のままに伝える貴重な民俗文化財として、長崎県の無形民俗文化財に指定されています。保存会の人たちが、早くから浮立を後世に伝承するという使命感をもって取り組んできたからこそ、残っているのです。

かつて、<sup>4</sup>佐世保市内には10以上の浮立がありましたが、ほとんど行われなくなりました。また、復興された浮立や、わずかに伝承されている浮立は古い様式を失っており、その意味で木場浮立は、貴重な民俗芸能なのです。毎年、4月の第1日曜日に、上木場グランドで実演されています。

日宇には日宇里免(元触)浮立も伝えられており、戦後に一時衰退しましたが、地元の人たちの努力により復興し、子どもたちも加わって大和・白岳浮立として夏祭で上演されています。

4 木場、大和・白岳浮立のほかに、上原、権常寺、浦川内などに浮立が残っているが、潜木、崎岡、庵ノ浦、横手、馬賁、三川内、陣ノ内、重尾、長畑、指芳、崎辺、川谷、戸平田、竹辺にあった浮立は行われなくなってしまった。

## ふじわらかまあと 藤原窯跡

猫山の向かい側の丘は、以前は射撃場があつて寂しい場所でしたが、今では山を削り、谷を埋めて「もみじが丘団地」になっています。その団地に面した山裾に、藤原窯跡があります。

佐世保の伝統産業である三川内焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に出陣した平戸の松浦鎮信が1598年（慶長3）に連れ帰った朝鮮陶工の一人である巨関の子、今村三之丞が、領内で良い陶土を求めて探索する傍ら、藤原で試験的に窯を開いて焼き物を焼いたのが始まりという説がありました。つまり、藤原窯が三川内焼の基礎を築く最初の窯と伝えられていたのです。

ところが、もみじが丘団地造成の時にに行った発掘調査では、18世紀に現れる刷毛目茶碗という陶器しか出土せず、窯の大きさからも18世紀のものであることがわかりました。藤原窯は、三之丞が陶土を探し、諸国へ焼き物の研究に出かけた時期より、100年も後の窯だったのです。刷毛目茶碗は陶器であることから、三川内地区で最も古い焼物と誤解されたのです。

刷毛目茶碗は、18世紀になって、大量に三川内地区の窯で焼かれます。三川内地区全体で5基ほどある窯で、一斉に焼き始めています。一時的な流行として関西方面などから大量に注文が入ったのでしよう。三川内地区の窯だけでは注文の量をさばききれないため、日宇の藤原に窯を築いて注文に応じたものと考えられます。そのため、注文がなくなると、藤原窯も閉鎖されました。わずか10年前後しか窯の火は、続かなかつたと思われまふ。



藤原窯跡から出土した刷毛目茶碗

- 5 天下統一を果たした豊臣秀吉が、明国（中国）を征服しようと朝鮮半島に出兵した事件。1592年（文禄元）、1597年（慶長2）の2度行われた。出兵した諸大名は陶工など多数の技術者を連れ帰った。朝鮮では壬申・丁酉の倭乱と呼ぶ。

### 郷土の人～教育の父 森本儀太郎～

森本儀太郎は、平戸藩士の子として、1838年（天保9）に平戸で生まれた。幼少のときから学問に励み、父の帰国とともに平戸に移り、藩庁で役職についていた。

明治になって職を離れ、1873年（明治6）に日宇の旧藩士らによる学塾「日宇義塾」に招かれて漢学などを教えた。その後、学制が敷かれると日宇小学校で教鞭を執っている。

1888年（明治21）、授業中に病に倒れた。享年52歳、日宇の教育史で記念すべき人である。



森本儀太郎

## 近代の日宇

明治時代に入り、佐世保に軍港と鎮守府が置かれると、佐世保に隣接していた日宇村は、急速に市街化が進みました。<sup>6</sup>海軍工廠などの軍関係に勤める人たちの住宅地として、開発が進んだためです。あまりにたくさんの方が佐世保に働きに行くことから、佐世保市と日宇村とに分かれてはいろいろな面で不便だったため、1927年(昭和2)に日宇村は、佐世保市の一部となりました。

佐世保の海軍工廠の施設が充実し、崎辺地区に海軍航空隊ができると、日宇川河口に広がっていた干潟は埋め立てられて、飛行機を造ったり整備したりするための工場(第21航空廠日宇工場)が建てられました。しかし、埋立地が地盤沈下を起こしたため、本格的な生産は行われませんでした。

6 海軍の武器・弾薬等の軍需品を生産するための工場。

## 海軍墓地

佐世保鎮守府の開庁後の1891年(明治24)、佐世保鎮守府に所属していた軍人のための墓地が、佐世保港を見下ろす天神山の中腹に造られました。墓地は、甲、乙、丙、丁、戊の5つの区に分けられていて、甲区から丁区は個人のお墓で、階級によってお墓の場所が決まっていました。



海軍墓地(砲弾を利用した門柱が見える)のお墓もあります。

戊区は、軍艦単位の慰霊碑の場所で、潜水艦や空母など、さまざまな形をした慰霊碑が建てられています。この海軍墓地には、佐世保鎮守府の開庁から、太平洋戦争終結までに亡くなった、17万6千人余りの軍人が祀られています。

このうち乙区には、日本初のワルツ「美しき天然」の作曲者として知られる、田中穂積海軍軍楽隊長

## コラム～佐世保発 ウズベキスタン着の物語～

名曲「美しき天然」は、1902年(明治35)に佐世保で生まれた曲である。軍港として発展する佐世保に、海軍軍楽隊長として赴任した田中穂積(1855～1904)が、創立したばかりの成徳女学校(現佐世保北高等学校)から依頼されて、歌人武島羽衣が作詩した「美しき天然」に曲を付け、日本初のワルツ曲を作り上げた。

西洋音楽の勇壮さと新時代を担う女学校のとりあわせ、そこに、田中は女性と西海の自然の美しさをイメージして作曲したのだろう。



田中穂積

また、美しい旋律にどこかもの悲しさを感じさせるこの曲は、「サーカスのジンタ」という名前でも知られている。ジンタジンタッタ・・・と昔は町にサーカスがやってくる時、チンドンヤの掛け声と一緒に、この曲が流れてきたものだった。名前は知らなくても、そのメロディを聞けば懐かしい風景や思い出がよみがえる、それほど日本人の心の中に浸透していた。ところが、高度経済成長期を経て人々の生活がすっかり変わってしまうと、「美しき天然」はいつしか生まれ故郷である佐世保でも、その由来はもとより名前さえも忘れ去られ、今では過去の歌になりつつある。

しかし、この歌が、遠く中央アジアのウズベキスタンで今でも歌い継がれているのである。戦前の朝鮮半島に接した極東ロシアには朝鮮族の人達が暮らしていた。当時、朝鮮半島は日本が植民地(日韓併合)にしていたため、「美しき天然」が伝わり、「故国山河」と名前を変え、朝鮮族の歌として歌われていた。

その後、ソビエトの時代になって、極東ロシアに暮らしていた朝鮮族は、国策でウズベキスタンに強制移住させられてしまった。彼らは、慣れない土地での生活に苦労しながら、遠く離れた故郷を想いこの歌を歌った。「美しき天然」は、世代、国、民族を超えて懐かしく美しい故郷の自然を想う人々の心と共に歌い継がれたのだ。音楽に垣根は存在しない。

### ポタ山崩れの悲劇

現在では全て閉山してしまいましたが、佐世保地方にはたくさんの炭鉱がありました。日宇地区にも、黒髪町の山手に佐世保炭鉱という炭鉱がありました。炭鉱から石炭を採掘する時に、「ポタ」と呼ばれる質の悪い石炭や岩石、泥が大量に掘り出されます。これは、炭鉱の近くに積み上げられて「ポタ山」になります。佐世保炭鉱のポタは、烏帽子岳の斜面に積み上げられていました。

1955年(昭和30)4月16日夕方、この佐世保炭鉱のポタ山が崩れるという大事故が起きました。前日から続いた400ミリを超える集中豪雨により、ポタ山と山肌の間を溜まった雨水が一気に噴き出し、泥流となって麓の炭鉱住宅を襲ったのです。警察、消防、自衛隊や米軍による必死の救助活動が行なわれましたが、死者73名、負傷者5名を出す大惨事となりました。遺体の収容作業が全て終わったのは、事故発生から40日後でした。



事故現場に建つ慰霊碑

このポタ山は、以前から「亀裂が入っていて危険だ」という指摘がされていたにもかかわらず、炭鉱側が放置していたために起こった事故でした。集中豪雨という天災と、指摘の無視という人災が重なって起こった悲劇だったのです。

事故現場には一周忌に建てられた慰霊碑があり、今でも、事故の日になると遺族の方がお参りに訪れています。

時 代	出 来 事
旧石器・縄文時代 室町時代	約20,000～3,000年前 天神洞穴にたびたび人が住み着く。
1384年(元中元)	彼杵郡一揆契諾に日宇越前守純が参加する。
1421年(応永28)	彼杵郡一揆契諾に日宇出羽守勝が参加する。
戦国時代	
1518年(永正15)	妙珍禪尼銘の石塔が建てられる。
1545年(天文14)	日宇は大村氏(大村純前)の領地になっている。 その後、日宇は武雄(佐賀県武雄市)の後藤氏の領地になる。
1563年(永祿6)	平戸松浦氏と後藤氏が提携し、その後、日宇は平戸領となる。
1577年(天正5)	後藤惟明が日宇に移り住む。(伝)
1578年(天正6)	後藤惟明が白岳神社を創建。(伝)
江戸時代	
1666年(寛文5)	日宇大塔新田完成。
1720年(享保年間)	折原孫左衛門が日宇大潟新田起工。
1766年(明和3)	太田越衛門が尼潟新田を造る。
近代	
1874年(明治7)	日宇小学校開校。
1891年(明治24)	東山に海軍墓地ができる。
1898年(明治31)	日宇駅開業。
1927年(昭和2)	日宇村が佐世保市に編入される。
1941年(昭和16)	第21航空廠日宇工場、猫山高射砲台完成。
現代	
1955年(昭和30)	佐世保炭鉱のボタ山崩れが起きる。
1976年(昭和51)	白岳神社が現在地に移転。